



## 世直し証文に関する一考察

—下野世直しにみる文書と民衆—

齋藤悦正

はじめに

慶応四年三月下旬より四月にかけて下野国の河内・芳賀・都賀各郡を中心に発生した世直し一揆は、戊辰戦争の下野局面での展開とはほぼ同時に発生した。世直し勢は、質物の無償返還や年賦返還、米金の抛出などを村役人や豪農商らに対して突きつけ、応じない場合には、居宅や家財を悉く打ちこわすなどの行動をおこなった。しかし、世直し勢によって行われた活動には、このような打ちこわしなどの実力行使だけでなく、その過程では、証文を介して世直し要求を誓約させ、実現しようという場面も散見された。<sup>〔1〕</sup>

このような、世直し勢が村役人・有徳人らに金穀の抛出や質の返還などを約束させた証文は、史料上「請書」「対談書」「示談書」などと記され、またこれまでの研究においては、「降参証文」や「世直し契状」、誓約書などと呼ばれてきている。<sup>〔2〕</sup>

近世民衆運動における史料をめぐる分析は、一揆記録などを中心にした分析が挙げられるが、世直し状況下において作成されたこれらの証文については、いまだ正面から分析の対象とはなっていないようである。世直し勢とそれに対峙した豪農商・村役人らとの緊張のなかで作成された証文には、地域やその時期などの特質が反映されていると考えられ、また双方の世直しに対する認識、ひいては文書に対する認識をうかがうこともできるのではなからうか。

本稿では、世直し勢が村役人や有徳人らから獲得した、世直し要求項目などを記すこのような証文を「世直し証文」と呼ぶこととし、この証文をめぐる、下野世直しの特質や世直しの展開過程、証文作成の背景とその位置、さらに当該期における文書をめぐる認識・特質などを考えていきたい。

## 一 世直し証文の内容

### (一) 世直し頭取と証文の獲得

下野における世直しは、慶応四年三月下旬頃から河内郡や都賀郡などで屯集の動きが活発となり、四月に入ると加えて芳賀郡でも同様の動きが起こり、同月から翌閏四月にかけて各地で打ちこわしや火付けが展開している。下野中央部に位置する河内郡の宇都宮城下では、三月下旬より東郊の村々で集会が催され、四月三日には百姓らが屯集し、近在の質屋・酒造家宅などの打ちこわしが発生している。宇都宮より南方の安塚村や三村でも三月下旬より騒動が発生し、宇都宮城の北にある八幡山では、屯集した世直し勢に対し、藩兵が大砲を打ちかけるなどの場面もみられた。河内郡内の各地の村々でも激しい打ちこわしが発生している。

下野の西南部に位置する都賀郡では、三月五日ころから「鹿沼宿へ向直下げ致すべき」と村々が動き始めており、さらに鹿沼宿では、四月四日に世直しに参加すべき旨の廻状が上・下奈良部村から上・中・下石川村、初山村、茂呂村などを廻っている。<sup>(5)</sup> この結果、大石坊などに屯集の動きがみられ、鹿沼宿周辺村々の豪農商への打ちこわしが始まっている。

次の史料は、そのような中で鹿沼地域の打ちこわしの発端である四月四日、都賀郡佐目村（現鹿沼市佐目）が世直し勢に余儀なく提出したという証文である。

差し上申一札之事<sup>(6)</sup>

一 質地之儀は拾ヶ年季にて、元地主方へ手作為致、尤御年貢諸役銭之義は、作人方にて上納可致筈、拾ヶ年相立候ハ、元金有合次第相返し可申筈

一 質屋渡世之者忝人も無御座候

一 酒・醬油・油等商致候者、忝人も無御座候

一 肥金之義ハ、全く困窮之者へは、村役人目鑑ヲ以、有徳之者より可貸遺事

一 窮民夫食之義は、家内人別相改メ、有徳之者より可貸遺候事

右之通り、対談取究候上は、百姓仲間一同相続行立候<sup>(様カ)</sup>處、相互ニ可致候、為後日差し上申一札、仍て如件

辰ノ四月四日

佐目村

百姓代 藤兵衛

与頭 源之助

名主 藤左衛門

笹川数馬様

鈴木直見様

これは、都賀郡に知行所をもつ旗本畠山木久麿の栃木町役所で記録された「御用留」に書き写されたものである。佐目村の役人三名が、笹川数馬・鈴木直見の二名に差し出したものである。笹川・鈴木は、都賀郡鹿沼を中心にした世直しを主導した頭取である。都賀郡の世直しの頭取は、「博徒打之体、一刀を帯、晒し切にて鉢巻いたし、拔身鎧を携ひ、老人は楡木宿観音寺住僧之由、都合五六人」と伝えられており、この五六人のうちの二人のことを指していると考えられ、博徒体とされているが、一方で水戸浪士との記述もみられる。<sup>(8)</sup>

証文の記載項目は、①質地は十年季、元地主が手作をし、年貢・諸役銭は作人が上納、十年経過後は「元金有合次第」返還する、②質屋渡世、酒・醬油・油商などの有無、③肥し金は「全く困窮之者」を村役人が選定し、有徳人が貸し遣わすこと、④窮民夫食は、家内で人別を改め、有徳人が貸し遣わすこと、の四点となっている。

このように世直し勢の頭取名を宛名とし、証文によって要求を獲得しようとしたことは、同郡において他の村でもみられた。

#### 差出申一札之事<sup>(9)</sup>

一質地証文之義は、拾ヶ年賦ニて相返し可申事

一質物之義ハ、夏入用之品は不残只今相返し可申事

金物之義は当十月元金ニて相返し可申事

一質之利足金、壹両ニ付百文ニ可致事

但、質ハ是迄之通出入可致事

一肥金ニ差支候ものへ当秋迄金子相貸可申事

一穀物之儀は、困窮之者へ当十月迄貸可申事

右之通、東最寄九ヶ村、左之通取極申候間、外村方之義も同様相改申候事、若此義相背候もの有之候ハ、直様  
打ちわし候事

右承知之上ハ旗印相立可申事

慶応四辰年四月五日

笹川数馬様

鈴木直司様

右之通、当今世直しと唱ひ、村々一同誘引被致、無余義書類差出申候間、此段御届奉申上候、以上

辰四月十四日

御領分大和田村

組頭 善左衛門

名主 善吉

御陣屋役所

これは、畠山知行所の大和田村役人が四月十四日に至って役所へ届け出たものであるが、先の佐目村の証文の翌日である四月五日付で頭取笹川・鈴木に対して差し出したものである。この世直し証文の部分には、差出人は記していないものの、佐目村の近隣にあたる大和田村を含む「東最寄九ヶ村」がこの取り決めに同意し、「無余義書類差出」をしたとしている。これによれば、「東最寄九ヶ村」以外についても、打ちこわしを背景に同意を要求しており、こ

の世直し勢の展開範囲の広さをうかがうことができる。

本証文の取り決めでは、①質地証文は、十ヶ年賦で返還する、②質物は夏入用品を残らず返還し、金物すなわち質金は当十月元金で返還する、③質の利足は一兩につき百文、④肥し金に差支える者への金子貸与、⑤穀物を困窮者へ十月まで貸与、の五点が明記されている。これらは、先の佐目村の、前日四日に差し出した証文と比較すると、ほぼ同じ項目が掲げられているものの、質に関する規定や肥し金貸与の時期などはより具体的になっていることがわかる。さらに、一村に対して差し出させたものではなく、複数村同時に取り交わした形になっている。四月四日から五日の間に、世直し要求はより具体的な内容に鍛え上げられている上、地域村々との間で統一内容で交渉されていることがわかり、世直し勢と村々の対応の推移も垣間見ることができ。

また、世直しにおいては、ここでの例に見られるように村外の者による主導が大きな影響力を持っていた。ここで証文が各村宛になっておらず頭取宛になっている点に、頭取の当該地世直しにおける影響力・権威の大きさが示されているといえる。<sup>(10)</sup>なお、「右之通東最寄九ヶ村、左之通取極申候間、外村方之義も同様相改申候事、若此義相背候もの有之候ハ、直様打こわし候事」とのくだりは、差出人から記されたものというよりは、むしろ笹川・鈴木らの側から文が提示されたと推測することもできる。

しかし、この頭取は同日中に世直し勢によって殺害されることになった。各地を打ちこわして廻っていた際、頭取が世直し勢に内々で有徳人らに金策を申し入れ、これに応じた有徳人宅を打ちこわしの対象から外していたことが発覚したからである。こうして、世直し勢は、自ら頭取を否定していったのである。世直しに参加した村々からの百姓らは、不参加ならば一村焼き打ち、という脅迫を背景にした参加強制もあって打ちこわしに加わっていたが、頭取の殺害後、各村々の者はそれぞれ帰村しはじめ、各地を打ちこわして廻る行動は、一応の終息に向かうこととなった。

大和田村では、「頭取之もの相企候趣意ヲ相用ひ、右村役人先立掛合之上、私共預り置候質物ヲ元利一切不差出、品物相返し呉候様再応懸合ニ被及候ニ付、時節柄故無挽不残相返し差遣」す<sup>(1)</sup>とあり、頭取名で獲得した要求項目履行を迫つてこれを実現しているが、村側では、この件を「不法」として領主に対し事態の收拾を訴えている。しかし、このように証文の宛名に記された二頭取が殺害された後、前述の世直し証文はその効力を急激に失うこととなつたと考えられる。この日の頭取殺害の報は、翌六日には畠山氏栃木陣屋へも報告されている。そして七日に至り、粕尾村勝願寺では、周辺三ヶ村が集会を持ち、「質出し質地借用証文相返し候相談」が行われ、また「四ヶ村相談之上、義定ニ任調印いたし候事ニて、一同引取」という動きが見られた。さらに翌八日には「村式拾九ヶ村儀定書認メ一札、宿方より請取、村々よりも出ス、窮民救可致様之事談示御座候」と、より大規模な村々での交渉が行われている。このように各村では、「強談」による村方騒動として、世直しが深化していくことになった。蜂起当初から行われた激しい打ちこわしは、この「強談」実現の上で、重要な前提になった。都賀郡では、「一同証文」「一本証文」との名で質の返還や米金の施行などの要求を村役人らの印を据えた証文で獲得すべく、村内で翌閏四月頃にかけて根強く交渉が行われている。これらは、先の頭取宛世直し証文の成果を、村々に即して再び確実なものにしていくなための行動だつたといえる。

鹿沼近辺での世直しが発生した日、鹿沼宿の北方にあたる文挾宿とその近隣でも世直しが発生し、五日には文挾宿問屋で打ちこわしが発生している。当地においても次のような世直し証文が作成されている。

差入申一札之事<sup>(13)</sup>

一今般世直し之儀者、是迄村々取極ニ相成候通り、急度相守下直ニ可仕候、依之一札差入申處、依而如件

慶応四辰年四月四日



上岩崎村

百姓代 富之丞 ㊦

名主 栄 次 ㊦

## 御一統様

これは、四月四日都賀郡上岩崎村（現今市市岩崎）において、村役人名で世直し勢に対し「御一統様」宛で差し出した証文である。この日は、先にも見た鹿沼宿で打ちこわしが開始された日である。岩崎村の東隣には、郡境を挟み河内郡古賀志村・新里村など、宇都宮城下からの打ちこわし勢が鹿沼に至る途中通過した村々がある。岩崎村では、このような地域の世直しの影響もうけていると考えられる。先の鈴木・笹川らの頭取に主導された世直しとは違ったものであったことは、この証文の内容や様式などからもうかがうことができる。この証文によれば、世直し勢は村に対して、「村々取極」に従い、物価の値下げを誓約させている。「村々取極」の内容が具体的に明らかではないが、質の返還や金穀の施行などについては、言及されていない。上岩崎村では、この証文のほかにも世直し勢に差し出されたと思われる証文が数通作成されている。一つは、同じ四日付けで同村の清左衛門と百姓代である富之丞が「御一統様」宛てに差し出したもので、村役人（年寄・年番名主）の奥印も据えられているもの。今一つは、五日付けで、村役人（年寄・年番名主）が差し出したもの。これらは、ほぼ同文の証文であり、記載内容に特に相違はない。この村と同じ世直し勢が周辺村々にも展開していたことは、さらに同文の世直し証文が残されている点から推測できる。

差入申一札之事<sup>14)</sup>

一 今般世直し之儀者、是迄村々取極メニ相成候通り、急度相守直下ケ可仕候、仍而一札差入申処、如件

慶応四辰年四月五日

下猪倉村名主 啓之助 ㊦

御一統様

組頭 兵 吾 印

これにみるように、先の史料とほぼ同一記載の証文が下猪倉村役人からも発給されており、さらにもう一通、文挟宿問屋・百姓代の同文同日付「御一統様」宛証文も確認されている。<sup>(15)</sup>これらは、差出人の捺印があり、写しではなく正文である。本来、「御一統様」と表現される世直し勢に差し出されたものが、何らかの経緯で取り返されたか、ないしは世直し勢に提出されずに済んだと考えられる。証文の様式が同一であることは、同じ構成員による世直し勢の活動と推定しうるのであり、当地での世直し要求獲得の様式が定式化していることもうかがわれている。

## (二) 世直し大明神と世直し証文

一方、都賀郡でも南方に位置する下津原村（現岩舟町）を席巻した世直しでは、次のような証文が作成された。<sup>(16)</sup>

一 此度世直しニ付、貸金と其外質物ニ至迄、不残相返シ可申候、但シ此度之儀ニ付、違返等無之候処、右之趣致承知、此外村内穀物何程成共可差上候、以上

四月十三日

世直し大明神様

下津原村

西沢藤左衛門 印

これは、同村で酒造・穀屋・質屋などを営んでいた近江出身の商家西沢屋に世直し勢が押し掛けた際、同家に作成させたものである。この史料は、宛先を「世直し大明神」として、質の無償返還を約した点が特徴的である。先にみ

えたような、質地・質物・質利金など年賦償還に関する事細かな誓約事項はなく、ただ「貸金と其外質物ニ至迄、不殘相返シ可申」との全面的な世直し勢への「降参」、返還を誓約している。下野世直しにおいて「世直し大明神」を史料上でうかがえるものは、そう多くない。<sup>(17)</sup> この「世直し大明神」登場については、下野の世直しよりも先に発生・展開した、上州世直しとの関連性が指摘されているが、<sup>(18)</sup> 大明神の登場の例として、都賀郡で「世直し大明神」の張札が出されたという時期は四月十八日である。管見の限りでは、下津原の例とともに当該地域での世直しの初発でこれらが登場しているわけではなく、騒動の深化のなかで、世直し勢があえて正統性を表現・担保しようと持ち出してきた神格であったと考えられる。

なお、当史料には、各所に切り込みと黒ずんだ染みがあるという。これは、証文が後に西沢屋に取り戻された際に付着した血液と刀などによる切り傷といわれている。<sup>(19)</sup> これについては、同家文書にも当文書の包紙部分に「非常一札無拗差出し候所、風与致候仁ぶ世話ニ而取戻し、為念取置候」とあり、一旦世直し勢に提出されたものが、ある者の世話によって取り返されたと伝えられている。この世直し大明神宛の証文には、世直し一揆が広範に波及拡大していくなかでの、世直し意識の高揚が表現されているといえる。

同家では、この証文での取り極めをうけ、四月中に九三名に対し六貫九八六文宛の施行、酒肴代として六五〇貫文の拠出を行っている。また、世直し証文で質の返還・穀物拠出を誓約した以外に、慶応三年二月以降に引き受けた質の扱い方法について、「非常ニ付質物左之通」の事書きで始まる約定の控を作成している。<sup>(20)</sup> これによると、同郡内の只木・太田村(現藤岡町)と羽抜村(現岩舟町)の三ヶ村に対して、延質や利金の扱い等を取り決めている。これにより、西沢屋を目標にした世直しが、下津原村より南方の諸村によって担われていたと考えることができる。先の「世直し大明神」宛の証文に比して、質に関する様々な条件が具体的に決められている。これは、「大明神」宛証文の

提出以後、ないしは取り返された後も、誓約事項の実施を強く求める火札が同家に張られ、引き続き脅迫と監視が続く中、返還規定が具体化したものと考えられる。<sup>(21)</sup>この地域の世直しは、佐野藩（堀田氏）と飛地を近隣に有していた彦根藩（井伊氏）が鎮圧にあたり、頭取も殺害されて終息に向かったが、六月に至って半金で質の返還を実施している状況からは、世直しの鎮圧後も、いまだ地域内での緊張関係が継続していたことを推測させる。

## 二 世直し証文作成の背景と認識

### （一）証文作成の背景

ここでは、以上のような世直し証文の、世直し勢と村役人・有徳人らとの間で取り交わされた経緯と背景についてみていきたい。百姓らの屯集の段階から打ちこわしなどの行動の推移、終息に至る様相をとりわけ詳細に記録を残している、都賀郡鹿沼周辺の世直しでは、次のように記されている。

鹿沼地域は、慶応二年より鹿沼宿内に張札が張られたり、宿内の中心にある天神山などで百姓らが集会を行うなどの動きがみられ、同四年に至っても三月中旬頃より近郊の村々で集会が行われていた。四月に入るとまもなく打ちこわしが発生し、またたく間に宿周辺村々の村役人・豪農宅などが世直し勢の押し掛けをうけ、金穀の拠出や質物の返還などが要求され、これに応じない場合には、打ちこわされている。先に見た鹿沼宿・文挾宿の世直し証文は、四月五日前後に作成されたものであったが、四月五日は、宇都宮藩より世直し勢鎮圧のため加藤庫之助が鹿沼に向け出張した日であった。宇都宮方面からの鹿沼宿の入口に当たる御成橋では、宇都宮藩兵の追撃を逃れ、宇都宮の北方を迂

回しながら鹿沼に入ろうとする世直し勢が銃撃され、死傷者がでている。この情報を受けた鹿沼地域の世直し勢にとつては、鎮庄の本格化を最も強く認識した事件であつたと考えられる。世直し勢は、宇都宮藩兵の接近・鎮庄以前に要求項目を獲得しようと考えていたのでなからうか。

鹿沼宿近在の武子村では、四月五日「新左衛門殿徒党人屯所江対談ニ行、雨中ぬればふニ而掛合いたし、諸色値下ケ降参之旗印可差出旨ニ付直下」げとあり、有徳人が世直し勢の屯所へ赴いて諸色の値下げに応じ、「降参」する旨を約している。ここでは、干鰯・メ粕・糠・酒・質の利息などの値段を決めた書面をもつて証文を取り交わせさせようとしていた。しかし、この交渉の直後、御成橋で一揆勢は鎮庄されて総崩れとなり、北方の文扶宿方面、富岡村方面へ散乱したといふ<sup>(22)</sup>。また、「四月七日夜西沢より浪人観音寺江参り候向ニ而、三ヶ村相集り、国蔵店ニ而相固候村方人数不残差出し、此義間違ニ而新田・油田・佐目騒立、西沢村より詫入済方ニ相成申候、夫より四ヶ村相談之上議定ニ認調印いたし候事ニ而、一同引取申候<sup>(23)</sup>」とあり、西沢村など四ヶ村が議定を作成し調印したことで、世直し勢が引き揚げるという状況であつたことが分かる。

また、下総・上野の国境にも近い同郡藤岡宿近辺では、四月十日頃から村々で屯集の動きがあつたところへ、「村々惣代役人出張ニ罷出、強勢ニ年賦之趣承度、印形差出候様被申哉下書持参ニ付、出張役人共大勢ニ被取巻、無余義書類差出」したとあり、世直し勢は、予め下書を用意した上で、要求項目への承諾を強制している。この結果、当地では「差入申請書之一札之事」の書き出しで、計六か村役人が連名の上「宿村六ヶ村願人惣代中」宛で、質物は七か年賦、証文金は五か年賦と取り決めた「村々惣本証文」を作成している<sup>(24)</sup>。

戊辰戦争の戦況の推移に従つて騒動の鎮庄が本格化するなか、世直し勢は必ずしも打ちこわしのみでなく、証文獲得をもつて目的の達成とし、後日それが履行されることを期待していたようである。世直し勢は、相手から獲得した

証文に、自らの要求項目の確實さを込めようとしていたといえよう。

(二) 世直し証文と村役人の動向

世直し勢が、要求内容を書面で獲得しようとしていたことは、下野東南部の芳賀郡においても見受けられる。ここでは、主に芳賀郡における世直しの事例から世直し証文をめぐる村の認識を検討し、また文書の性格を史料の状況に即して考察を加えてみたい。

(a) 差出申一札之事<sup>(25)</sup>

一金百両

一米百俵

右者今般御趣意ニ付、差出降参仕候処、実正御座候、為念一札差出申処、依而如件、

辰四月七日

給部村

源次右衛門<sup>④</sup>

御一同衆中

(b) 覚<sup>(26)</sup>

一金百両

一米百俵

右之通、当村へ差出候処、相違無御座候、此段御披露奉申上候、以上

七日

給部村  
源次右衛門

誠右衛門

団次郎

左右輔

前者(a)の史料は、四月七日、芳賀郡給部村の名主源次右衛門が「御一同衆中」宛で、世直しに「降参」の上、同時に金百両・米百俵を提出を誓約した証文である。「御一同衆中」とは、同名主宅に押し掛けた世直し勢のことを指していると思われるが、具体的にその構成をうかがえるものとはなっていない。しかし、後者(b)の史料では、より具体的な宛名が記されている。この証文は、同日付で前者とほぼ同様の内容について記してあるが、金穀提出が当村つまり給部村に対して行われることが明記されている。誠右衛門・団次郎・左右輔の三名については、給部村の当時の宗門人別帳には見あたらない人物であり、他村から押し寄せた一揆勢の頭取であろうとの指摘がある。<sup>(27)</sup>この点から考えられるのは、給部村では、当該村での米金提出に関するものであるにも関わらず、他村の者(頭取)の名をもつて誓約させていることから、当村での世直し要求が村外の者(頭取)の威力のもとに獲得されたものであったということである。しかし、このことは一方で、名主から獲得した金穀提出の成果を文書の形で証拠づけるにあたつて、自村の者の名を宛先としないことで、村内の者はこの要求に関する責任の所在を曖昧なものにする意味をもったと考えられるのである。

なお、(a)の史料には、名主源次右衛門の捺印があり正文であるが、(b)は無印の控である。これらは共に、差

出人の名主宅に保存、伝存されてきている。この点については、(a)は発給後に取り戻されたか、一揆勢に渡さず  
に済んだかのどちらかであろうとの推測がある。<sup>(28)</sup>

芳賀郡、とりわけ北方の高根沢周辺における世直しについては、右にみた給部村を含め、有徳人の世直し勢による  
被害(金穀を提出額)などを記した書上がある。<sup>(29)</sup>これによると、書き上げられた家延べ二三軒のうちで、給部村同様  
「降参」を余儀なくされた家が一二軒あり(残りは、打ちこわしを受けたと推定される)、金穀を「金百両・米百俵」  
や「金千両・米千俵」などと提出していることが記されている。

これら当地の一連の状況は、下野中央部の河内郡に残された記録によれば、

福分者追々降参ニ罷出、古来の大じん向井戸、西根井福人之者共より米金千両千俵より次第ヲ附差出等ニて災難  
ヲのがれ候由、夫々身上ニ応シ扱人世話人方も有之、何程宛と取極メ対談書ヲ差出候(以下略)<sup>(30)</sup>

と述べている。ここでの「対談書」が前掲の証文に相当するものと考えられる。この取り交わしにあたっては「扱人  
世話人方」が立ち働いていることも判明するが、具体的には明らかでない。

給部村では、四月五日付の廻状で、村役人に村内の質屋・酒屋なども印形を持参し同道の上、組合村大惣代宅への  
参集が求められている。ここで世直しへの対応について協議したと考えられる。<sup>(31)</sup>しかし、これに加え、当時芳賀郡南  
部の新政府軍の北上の情報や戊辰戦争の推移などを近隣村々と連絡をしい、最も損失の少ない対応を模索していた  
点からは、村役人らの情報収集・社会状況判断の的確さをうかがえる。<sup>(32)</sup>例えば、給部村源次右衛門は、周辺の村役人  
間でその動向や対応について書簡で連絡を取り合っており、そこでは「全く危急の場合謀略ヲ廻らし、右之金米声高  
ニ申立、一同尤と納得、相向候義無之」と要求に応じる形を取るべきことが記されており、「貴家分ハ請書ハ差出不  
申候、只申触し候まで当座之智略ニ御座候、御安心可被下候」と請書の差出しの実否には齟齬があるものの、「当座



之智略」・「危急之場合謀略」という認識のもとに有徳人らが世直し証文を差し出していることがわかる。<sup>(33)</sup>この点から、世直し勢の襲撃を受けた他の村でも、同様に証文を提出するという対応が行われたと推定される。史料(a)(b)のような証文が、周辺各村においても同様に作成された可能性があると考えられるのである。

ちなみに、上野国とも接する足利郡での世直しは、三月中旬より河内・都賀郡の世直しに先行して発生していたが、そこでは次のように記されている。

其家々々金子何百両又ハ何千両、米も同様之事可差出、三日之内其所窮民共へ差配可致之書面請取退候様、速ニ請いたし候ものハ夫のみにて無事ニ罷在候、動乱いたし右請書差出兼申候ものハ粉微塵ニ打毀し候事之様ニ御座候、誠ニ其長短の間も無之事ニ候、<sup>(34)</sup>

金穀抛出を約する請書を早々に提出した者は、打ちこわしを逃れ、応じなかった者は「粉微塵ニ打毀し」を受けたという。世直し勢に迫られる中、速やかに請書すなわち世直し証文を出すことが、打ちこわしを免れる手だてであったのである。

しかし、その一方で村役人側からも証文取り付けを志向する場面も見られた。都賀郡の下南摩村の役人らが旗本畠山氏の陣屋役所へ届け出た書付によれば、次のように記されている。

別々窮民之為とて、兵右衛門・弥五右衛門・覚右衛門・条右衛門・幸藏五人之者に金子米共差出し呉候様にと存外之数を紙に記し持参いたし候、然るに、御時節柄 御上様之御心配に預り候も恐入候と存じ、種々申論し、棒引仕り、(中略)然候へども、当時不融通之折柄、右様には逆も差出兼候、(中略)右挨拶に及候処、小前之者ども其図に乗り候て、又然る上ハ、向後隣村にて弥証文書替候事に取極候ハバ、其廉に成し被下候様に頼入と変言仕候、依て中に立入候者共にて、変言之次第相尋候処、兎や角言紛らし候故、名当之者も斯く我意に変言いたし

候上は、如何ニ取締候とも、儘成書類にても不受取候てハ、少々たりとも差出し兼候始末に相成り候、然るに何故にや急に騒立一同役宅に來り、私共了簡有之候間、其旨承知可被下と理不尽ニ申撫、発足仕候段、聊相違無御座：（以下略）<sup>(35)</sup>

世直し勢が要求する事柄も事態の推移のなかで「変言」してきており、村役人は、「儘成書類」を受け取らない限り、米金提出などの要求に応じられないとの態度をとっている。世直し勢と村側の間に「立入候者共」も判然としなため、村役人側が、証文を作成することによって、世直し勢のなし崩し的な要求変更を阻もうとする対処が看取できる。これによれば、世直し証文は必ずしも世直し勢側のみの一方的な要求から作成されたものではなく、村役人側の意向としても、証文によって取り決め内容を明確にしようとする認識の下で作成されてきたものと考えることができるのである。

なお、先の芳賀郡給部村名主源次右衛門の発給した世直し史料を保存する綱川家文書をみていくと、世直しにおいて作成された史料群の性格の一端を推測することができる。まず、先の（a）の史料の案文（①）と後者で引用した（b）の史料（②）、そして周辺村々の書上（③）は、全て源次右衛門の手によって作成されたもので、当時同人が収集した世直しの風聞書などと同じ史料のまとまりの中にあつた。<sup>(36)</sup>さらに、この三点の史料は、全て同一の料紙に同一人物の筆跡（名主源次右衛門）で記されており、文書の作成された時点、すなわち四月七日かその直後に作成され、伝来したものと考えられる。<sup>(37)</sup>しかし、（a）の史料のみはこれらの一群にあつたのではなく、他の史料群中に含まれている。その史料群とは、源次右衛門に宛てられた書状類、つまり他者から綱川家に向けて作成され、差し出された史料の一群である。当史料の前後は、年欠ながら「辰六月」「辰九月」など辰年の史料が多くあり、（a）と同じ慶応四年と推定される文書とともに収納・伝来してきたものと思われる。この点から差出人源次右衛門の捺印を据えた正

文(a)が、一旦「御一同衆中」に発給された後、史料群内の前後の史料と同様、外から綱川家にやってきた史料(この史料に即して言えば、取り返された史料)と考えることができるのである。これまでに、同史料は発給後に取り戻されたものとの指摘は出されていたが、同様の推測は、この文書の伝来状況からも推定することが可能である。

(三) 世直し証文をめぐる鎮圧者の認識

芳賀郡の世直しでは、下野北部の那須郡に居城をもつ黒羽・大田原の各藩がいち早く新政府軍に降伏したことで、新政府軍の意を受けて世直しの鎮圧に乗り出している。両藩は、芳賀郡内に兵を出動させたが、とりわけ黒羽藩は、芳賀郡益子地域に「下之庄」とよばれる広大な飛地を有していることも関係して、積極的な鎮圧活動を行っている。そこでは、既に明らかにされているように、頭取詮索に臨み、村々に対し次のように触れている。すなわち、金穀は「差出ニ不及、右催促等申者は頭取ニ付可打取様御沙汰之趣」とし、世直し証文での誓約事項の履行は無用であること、抛出の催促をする者は頭取と見なすと触れたのである。さらには「今般之儀ハ対談書所持之者相改、是を頭取と相唱申候」と、世直し証文を所持する者を頭取とする旨を触れている。<sup>(38)</sup>こうして、世直し勢が獲得した世直し証文は、鎮圧側によって頭取詮索の決め手として、逆手に取られ利用されていくこととなるのである。このことによつて、「何程宛と取極メ対談書ヲ差出候者、騒動静り候後頭取ヲ恐れ、請取ニ参り候者老人も無御座候」とあるように、頭取詮議を恐れ、証文を携帯し金穀を受け取りに來た者がいなかったとされている。<sup>(39)</sup>

おわりに

当地方の世直しでは、金穀の拠出などの要求については、打ちこわしや火付けという実力行使を背景に、その場その場の交渉の中で質物返還や米金拠出などの諸要求が獲得されていくことが多かったが、ここで検討してきたように、各地では世直しの展開過程において、世直し証文が作成されていた。

この証文には、村役人が村全体の誓約事項として作成したもの、標的となった有徳人などが世直し勢の要求に応じたもの、さらには数か村が一同で調印したものなどがあり、宛先についても、頭取個人名宛で作成されたもの、「世直し大明神」宛のもの、また「一統」などと不明確ながら世直し勢全体を指し示す名称などさまざまであった。しかし、これらは、世直し要求のみならず、騒動の展開過程の様相や世直し勢とこれに対峙する村役人・有徳人らの認識、さらには、これらの証文を捉え返し頭取捕縛などの鎮圧の手だてとする領主（新政府軍）など、さまざまな立場・局面での対応が反映するものであった。

都賀郡で散見された証文には、その多くに物価の値下げや質物金などの返還などが誓約項目として掲げられていたが、一方で芳賀郡での証文には、それらの項目が皆無でないものの米金の拠出が主要な記載項目として挙げられていた。この点には、本稿では十分に言及できなかった点であるが、同時期に野州各方面で展開した世直し一揆の発生要因や社会構造などの地域的な特質も明確に表れているといえよう。

下野における世直し勢は、世直し証文を、獲得した要求内容の確実性と正統性を担保するものと考えていた。すなわち、権力空白期という無政府状況の中でも、文書は、民衆にとって重要な拠り所の一つと認識されていたのである。

〔註〕

- (1) 下野世直しに関する論考としては、大町雅美・長谷川伸三編『幕末の農民一揆』（雄山閣、一九七四年）、長谷川伸三「慶応四年野州世直し一揆の再検討」（小樽商科大文学「商学討究」三三、一九八二年）、大嶽浩良「真岡地方の世直し騒動」（『真岡市史案内』四、一九八五年）、深谷克己「世直しと御一新」（『近代日本の統合と抵抗』一、一九八二年、のち『増補改訂版百姓一揆の歴史的構造』、一九八六年所収）、同「世直し一揆と新政府反対一揆」（『近代日本思想大系二二「民衆思想」、岩波書店、一九八九年）、長谷川伸三「近世後期の社会と民衆」（『雄山閣、一九九九年』）などが挙げられるが、ほかに「栃木県史」通史編近世二、史料編近世七をはじめ、各市町村史にも各当該地域に関わる世直しの動向が詳述されている。
- (2) 大町雅美・長谷川伸三編前掲書、長谷川前掲論文、深谷前掲論文、長谷川前掲書。
- (3) 林基「近世民衆の社会・政治思想研究の史料的基础」（『専修史学』五・六号、一九七三・七四年、のち、『近世民衆史の史料学』青木書店、二〇〇一年所収）。深谷克己「幕藩制社会の階級闘争史研究について」（『歴史評論』二八九、一九七四年、のち「一揆研究の視点と史料」

- と改め『増補改訂版百姓一揆の歴史的構造』、校倉書店、一九八六年所収）、山田忠雄「騒擾・打毀し」（『日本古文書学講座』七近世Ⅱ、雄山閣、一九七九年、のち「一揆打毀しの運動構造」、校倉書店、一九八四年所収）、同「近世史料論」（『講座日本近世史』第一〇巻、有斐閣、一九九三年）、同「民衆史料論」（『岩波講座日本通史別巻3』、岩波書店、一九九五年）などが挙げられる。
- (4) 福田健夫家文書「風聞異説日記」（『栃木県史』史料編近世七、三二五頁、以下、「県史」と略す）。
  - (5) 佐藤光家文書「慶応二年御用留」（『県史』三三三三頁）。
  - (6) 岡田嘉右衛門家文書「慶応四年訴状留」（『県史』三五九頁）。
  - (7) 佐藤光家文書「別手東組聞書」（『県史』、三三四頁）。
  - (8) 中田益雄家文書。小貫隆久氏のご教示による。
  - (9) 岡田嘉右衛門家文書「畠山領訴状留」（『県史』三三六二頁）。
  - (10) 拙稿「下野世直しにおける民衆と地域秩序―世直し要求の正統化と地域寺院の動向を素材として―」（長谷川伸三・阿部昭編『近代移行期の民衆運動』二〇〇二年刊行予定）。
  - (11) 小森家文書（『鹿沼市史』資料編近現代1、三四頁）。
  - (12) 前掲拙稿。

(13) 矢嶋孝好家文書五九二号〔「いまいち市史」史料編・近世Ⅳ、三三七頁〕。

(14) 矢嶋孝好家文書四九一号〔同右、三三九頁〕。

(15) 矢嶋孝好家文書四九〇号〔同右、三三九頁〕。

(16) 藤沢博三郎家文書「世直しにつき貸金・質物返還約定覚書」〔「県史」、三四五頁〕。

(17) 管見の限りでは、鹿沼において「世直し大明神」の名で火札が貼られたとの記録があるにとどまる。

(18) 長谷川前掲論文。

(19) 深谷克己・河内八郎「史料紹介」〔「栃木県史研究」第三号、藤沢博三郎家文書「家史稿本」〕。現在、証文とともに原史料を確認することはできない。なお、「岩舟町の歴史」は、上州無宿金五郎がこの証文を受け取った頭取で、血痕・切り傷も仲間より殺害された際に付着したものとされている。

(20) 藤沢博三郎家文書「非常ニ付質物左之通」〔「県史」三四六頁〕。

(21) 同家文書〔「県史」三四六頁、栃木県立文書館蔵写真帳、長谷川前掲書〕。

(22) 福田家文書「慶応四年西鹿沼村福田富三郎日記」〔「鹿沼市史」資料編近現代Ⅰ、一九頁〕。

(23) 熊田一「慶応期村方騒動の研究」〔「栃木史論」9・10号合併号、一九七二年〕。

(24) 船田潜家文書「慶応四辰夏形勢内見帳」〔「藤岡町史」資料編近世、二三七頁〕。

(25) 栃木県立文書館寄託、綱川文太家文書二九五号。

(26) 同家文書、二四九一・二四九二号。

(27) 「高根沢町史」近世通史編、八八四頁。

(28) 同右。

(29) 綱川文太家文書「打ちこわしならびに降参富家覚書」〔「県史」、四二五頁〕。

(30) 半田弥平家文書「百姓騒動根本記」〔「県史」四二二頁〕。

(31) 綱川文太家文書「高根沢町史」史料編Ⅱ 八二〇頁。

(32) 長谷川前掲書。

(33) 綱川文太家文書「慶応四年四月十日付書簡」〔「県史」四一六頁〕。

(34) 小堀重雄家文書「下菱村小堀家日記」〔「県史」五一六頁〕。

(35) 阿久津済家文書「下南摩村御始末書」〔「県史」三三八頁〕。

(36) 同家文書の調査は、一九七四年頃に栃木県史編纂の過程で行われ、目録が作成されたが、ここでの調査方法は形態別に分類した後に内容毎に仕分けをしていくものではなく、大概を保存されたままの順番（通番）で整理・目

録化するというものであったようである。今日行われて  
いるような文書の原秩序や階層構成が詳細に目録番号や  
目録に反映したものではなかったが、史料保管状態の順  
番・前後関係は、大概において維持されてきていると考  
えられる。

(37) この三点の料紙は、楮で製された巻紙で、縦寸法・漉き  
目、さらに各史料の裁断面も共に一致する。

(38) 網川文太家文書「慶応四年四月十日付書簡」〔県史〕四  
一六頁）、長谷川前掲書。

(39) 半田弥平家文書「百姓騒動根本記」〔県史〕四一二頁）。

